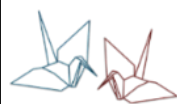


未来に向かって伸びる鶴嶺の子 鶴小だより 10月号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長 日高 大司郎
令和7年10月1日発行



「楽しい」を探しに・・・

先日、6年生の修学旅行に行ってきました。そのしおりを見せてもらって、こんなこと書けるなんてすごいなあ、育ってきているなあと感じたことがありました。それは、目標の部分です。何項目かあったのですが、その中に「自分から楽しいを探しに行く」という文章を見つけました。

「楽しい」という感覚、気持ちは、ごくごく個人的なものです。個人的なものだからこそ、一律に与えることができるものではありません。「楽しい」は、ひな鳥のように口を開けていれば運んでもらえるようなものでは決してないし、自分が取りに行かなければ、「感じることはかなわないもの」と言えるのではないかと思います。

担任をしているときに、僕が子ども時代に夢中になった遊びを教えて、よく子どもたちと一緒に遊びました。しかし、ちょっとした事で、「つまんなーい。」と言う子が必ずいました。これ、おかしいと思いませんか、自分の「楽しみ」を他人にどうにかして欲しいなんて。子どもたちは何故、自分が「楽しい」と感じることを人任せにするのでしょうか。自分が「楽しい」と思えるために、何故何をすべきかを考え行動できない、しないのでしょうか。

それは、これまで「自分で考え判断して行動」してこなかったからではないでしょうか。もっと言えば、学校で、お家で「言われたことをきちんと正確にできる」ことを求め続けられてきたからかもしれません。高度経済成長の頃の教育は、この「言われたことをきちんと正確にできる力」が求められました。同時に「たくさんの知識を自分のものとし、正確にそれを再生できるような力」(テスト等で測れる力)を求められました。

人は、自分が受けてきた教育のその価値観で教育を考えます。だから、時代が変わって求められる力が変わったとしても、教員も保護者もその考えをアップデートできずに、自分が受けてきた教育がそのベーシックになってしまう傾向があるのです。だから、相変わらず同じような教育が、引き続き展開されてしまうことは想像に難くありません。

では、そういった教育を真っ只中で受けていた少年日高はどうだったでしょう。振り返ってみても、誰かに「つまんなーい」って訴えた記憶はありません。遊びの中では、いつも誰かが(自分も含めて)「つままないから、ここのルールは〇〇にしようぜ！」なんて言って、自分たちで面白くなるよ

うにルールを変えるのが常でした。

僕が担任した子どもと少年日高の違いは、一体何でしょうか。「さん間(ま)」って聞いたことがありますか。子どもが健やかに育つために必要な「時間」「空間」「仲間」の3つの間の事です。僕の小学生時代は、習い事をしていたとしても習字かそろばん、週に1回という子どもがほとんどでした。僕らは有り余る「時間」を、子どもたちだけで謳歌していました。そして、田んぼや山や川、空き地、校庭、神社の境内などの様々な遊び場、つまり多様な「空間」もありました。その上、いつどんなときも、学校に行きさえすれば、誰かが遊んでいて、その遊びに入ることができました。いつでも「仲間」がいて、約束はなくとも、当たり前で遊んでいたのです。

この子どもたちだけの放課後はいつでも、自分に対する「どうする?! どうしたい?!」という問いの連続だったような気がします。自分で考えない訳にはいきません。考えなければ、そもそも遊べないのですから。自分の「楽しさ」を自分の心と相談して、そして一緒に遊ぶ友だちとすり合わせて実行する。これが毎日、毎日繰り返されていました。当時の子どもたちは、この「自分で考えて、判断して、行動する」ということが主体的な行為である「遊び」の中にしっかり組み込まれていたわけです。

こう見てくると、今の子どもたちが「楽しい」を人任せにする理由が見えてきます。残念ながら、この「さん間」は、どれも生き残っていません。そんな中で、僕たちはどうしたらよいのでしょうか。

そこで、意識したいのが、昔の子どもが日常的にしていた「自分で考え、判断し行動する」機会をできるだけ多くすることだと思います。そして、自分で決めたことは、きちんとやらせる。自分で決めて行動した結果は、自分で責任をとらせることを徹底しましょう。ついつい、手や口を出したくなりますが、それはダメです。そして、失敗したらやり直せばいいということをしっかり伝えてください。何度だってやり直せばよいのです。

誰かの言うとおりにしている子どもでは、これからの社会を生き抜けません。楽しみを待っている子どもでは、well-beingを手に入れないのです。自分自身の事を自分で心配できる子ども、楽しみを探しに行ける子どもを育てたいと強く考えます。だから本校の重点目標を、「子ども主体の学校づくり」と変えたのです。

「自分から楽しいを探しに行く」という目標は子どもが主体として考え始めているその証です。